

「食欲と欲す者を考察する第六章」

法の無我を説く>それに我が有る理由を否定する>依拠するものである全くの煩惱が有ることを否定する>

[章の著述を説く]

ここに言う。「諸々の蘊と界と處は、まさしく有る。(何故ならば) その拠所をもつ全くの煩惱が認められる故である。ここで、有るのではない拠所をもつ全くの煩惱は、認められることは無い。例えば、石女の息子や石女の娘の、全くの煩惱の如くである。食欲等の全くの煩惱の、全くの煩惱である諸因は有るのであり、斯くも世尊が、

『比丘達よ。聴聞を具えない凡夫である幼子が恒常に落ちるとは、(こうである。) 眼で諸々の形色を見て、心地良いところに顕かに執着するとなる。彼は顕かに執着して、欲望を起こす。欲す者となり、身体と言葉と心意によって、欲望より起こった業(行為)を実際に行うことになる。』

と、詳細に説かれた。

章の著述を説く>食欲と欲す者が本性として有ることを否定する>前後して起こることを否定する>

[食欲の以前に欲す者の有無を否定する]

述べよう。もし、諸煩惱等そのものが有るならば、蘊と界と處が有るとなるが、有るのではない—ここでこの食欲が尽く考察されたならば、欲す者が有るか、あるいは無いかと考えるものであるが、「双方の如くとも適わない。」と説く。

もし食欲の以前に、
食欲の無い、欲す者が有るならば、
それに依拠して食欲が有る。
欲す者が有れば、食欲は有ることになる。 1

食欲と、執着と、切望と、会いたがると、顕かに執着するということは、異音同義語である。

欲す者とは食欲の拠所であり、もし食欲の以前に、食欲の無い—食欲と離れたものが有るとなれば、食欲と離れたその欲す者に依拠して、食欲が有ることになる。そう見れば、「欲す者が有れば、食欲が有る。」ということが正しくなるが、食欲と離れても欲す者であるとなるようなものは無い。(何故ならば)阿羅漢方にも欲す者がいる背理となる故である。

「もし、そのように欲す者が有っても食欲が無ければ、ならば欲す者は無い

のである。」といえは。

「これも正理ではない。」と説く。

欲す者が有るとならなくとも、
貪欲が有ると、何処でなろうか。

欲す者が有って貪欲は有るのではない時、如何様に欲す者が有るとならないのか。それは、拠所の無い貪欲が成立したと何処でなろうか—果物無くしてまさしくその熟しは有るのではない。

前後して起こることを否定する> [欲す者の以前に貪欲の有無を否定する]

ここで言う。「もしまた、君が貪欲を否定はしたけれども、そう見るとしても欲す者は有るのである。(何故ならば) 否定していない故である。欲す者も、貪欲無くしては不適であり、それ故に、これも有る。」

述べよう。もし、欲す者が有れば貪欲が有るとなるものであるが、有るのではない。このように、この欲す者を主張するならば、貪欲が有るのか？無いのか？と考察し問えば、「双方とも合理ではない。」と説く。

欲す者についても、貪欲が、
有るか、無いかも、次第は等しい。 2

そこでもし、貪欲が有れば欲す者が有ると考察するならば、そう見るとしても「もし欲す者の以前に、欲す者の無い、貪欲が有るならば、¹⁾」等によって、欲す者についても、説いたばかりの貪欲が不合理であるまさしくこの次第に等しい。もし、貪欲無くして欲す者を主張するならば、これも正理ではなく、このように「貪欲が有るとならなくとも、欲す者が有ると、何処でなろうか。²⁾」それ故に、欲す者も無い。貪欲と欲す者が無い故に、蘊等も無い。

その正理を他にも適用する> [一緒(同時)に起こることを否定する]

ここで言う。「そこからこの過失となる『貪欲と欲す者は前後して起こる』とは、まさしくそうではない。ならば如何かといえは、貪欲と欲す者はただ一緒(同時)に起こる。心と一緒に起こる貪欲によって心は欲すとされたが、それ

¹⁾ 「もし…ならば、」:『根本中論』第6章1偈の言葉を変換する。

²⁾ 「貪欲が…なろうか。」:『根本中論』第6章2偈の言葉を変換する。

(心) が欲す者であり、それ故に貪欲と欲す者は有る。」といえは。

一緒(同時)に起こることを否定する> [相互関係が無いので、一緒であることを否定する]

説こう。そう見るとしても、

貪欲と欲す者が、
まさしく一緒に生じるとは正理ではない。

貪欲と欲す者の二つが一緒に生じることとも正理ではない。何故ならば、

このように、貪欲と欲す者は、
相互関係が無くなるだろう。 3

『一緒(同時)に起こる(生じる)故に、黄牛の左右の角の如くである。』という御考察である。

一緒(同時)に起こることを否定する> 同一と別において、一緒であることを否定する>

[同一と別において、一緒であることを一般的に否定する]

他にも、これらの貪欲と欲す者は、まさしく一緒に、まさしく同一なのか？別のものか？と考察される。そこでもし、まさしく同一においてであるならば、それは適わない。何故ならば、

まさしく同一であるものは、まさしく一緒には無く、

また、何故無いのかといえは、

まさしくそれは、それと一緒ではない。

このように、貪欲より不別である貪欲自体の我性は、「貪欲と一緒である。」と述べられるものではない。

ここで、別そのものにおいても、まさしく一緒であることは無いと説く。

もし、別そのものであるならば、
一緒であると、如何様になろうか。 4

光と闇や、輪廻と涅槃という別となったものごとにおいては、まさしく一緒であることは見られていない。他にも、

もし、一つだけが一緒であるならば、
友が無くともそうなるだろう。
もし、別のものが一緒であるならば、
友が無くともそうなるだろう。 5

もし、ただ一つにおいて、まさしく一緒であるとなれば、その時「何と何に同一性が有るそれとそれは、一緒（同時）性が有る。」というので、ただ一つのものにおいても、一緒（同時）性が有ることになるだろう。

まさしく別において一緒（同時）性を主張しても、「何と何に別性が有るそれとそれには、まさしく一緒（同時）性が有る。」というので、馬等より別で、友無くそれぞれ独りで居る黄牛でも、まさしく一緒に有ることになる。

同一と別において、一緒であることを否定する>別において、一緒であることを特別に否定する>

[別として成立していないので、一緒は成立しない]

他にも、

もし、別が一緒であるならば、
如何にして食欲と欲す者が、
別そのものとして成立するとなろうか。
然れば、その二つは一緒となる。 6

もしまた、まさしく別である食欲と欲す者において、一緒（同時）性を考えるならば、この二つはまさしく別として成立したのであるだろうか？何からそれらはまさしく一緒であるとなるのか？

如何にして「食欲は欲す者に相互関係しない」、あるいは「欲す者も食欲に相互関係しない」というように成立したのか？

このように、別として成立した黄牛と馬のみにまさしく一緒であることを見るようなものであるならば、食欲と欲す者はそのように別として成立したのではないので、その二つにおいて一緒（同時）性は無い。

別において、一緒であることを特別に否定する> [別として成立したならば、一緒は必要性が無い]

もしまた、別として成立していない複数のものに一緒（同時）性は無い故に、

もし、貪欲と欲す者が、
まさしく別として成立したならば、

と、君が考えるならば、ここに「僅かにも働かない一緒（同時）性を考察して何をするのか。」と説く。

それらはまさしく一緒であると、
何故、尽く考えるのか。 7

貪欲と欲す者が成立させられた為に、一緒（同時）性を考察するのであるが、それも別として成立していないものにおいて有るのではないので、別として成立したと承認するならば、そのように成立している故に、これらの一緒（同時）性が何をしようか。

別において、一緒であることを特別に否定する>

[別が「一緒」に対応するならば、相互依存すると示す]

あるいは、

別として成立したとならないので、
それ故に、一緒を主張するならば、

貪欲と欲す者は、別として成立したことが有るのではない故に、もしこれらがまさしく一緒であると主張するならば、それも別として成立していないものに有るのではないので、

一緒が良く論証せられる為に、
まさしく別であると、再び主張するのか。 8

そのようであれば、成立したことは互いに依拠して留まることであり、それが成立したことによって何が成立したことになろうか。何故ならば、

別の事物であると成立していないので、
一緒の事物は成立しないだろう。
別の事物である何が有れば、
一緒の事物であると主張するのか。 9

別の事物である何かが有れば一緒の事物が成立したとなる、一緒の事物に相互関係しない別の事物とは、まさしく有るのではない。それ故に、あり得ないとお考えになって説く。

「別の事物である何が有れば、一緒の事物であると主張するのか。」

章の著述を説く > [諸批判のまとめ]

それ故に、そのように、かくも説かれた分析によって理解したので、貪欲と欲す者の二つが成立していないことをまとめる為に、

そのように、貪欲と欲す者は、
一緒であるとも、一緒でないとも成立しない。

と説かれた。

章の著述を説く > [その正理を他にも適用する]

「貪欲と欲す者は前後して成立していないけれど、まさしく一緒（同時）であるとも成立していないが如く、一切事物も（同様）である。」と類推する為に説く。

貪欲の如く、全ての諸法（現象）は、
一緒であるとも、一緒でないとも成立しない。 10

瞋恚と、怒る者と、愚痴と愚昧な者についても、貪欲と欲す者のように成立していないと当てはめたまえ。

依拠するものである全くの煩惱が有ることを否定する > [了義の教証と合わせる]

まさしくそれ故に、世尊が、

「何者が欲するか、何を欲するか、何によって欲するかと、何者が瞋恚し、何に瞋恚し、何によって瞋恚するかと、何者が愚痴であり、何に愚痴であり、何によって愚痴となるかというその法（現象）は、その者によって清浄であると見られず、認識されない。その者によってその法（現象）は清浄であると見られず、認識されないので、貪欲無く、瞋恚無く、愚痴無く、誤りの無い心で、『等引³』という。『超越した波羅蜜⁴』という。『善逝⁵』という。『得無畏⁶』から、『漏尽⁷』（まで）という。『煩惱が無く、

³ 等引^{とういん}：空性を直覚する瞑想状態と、その意識。

⁴ 波羅蜜^{はらみつ}：大乘仏教の彼岸へ行く修行道。ここでは凡夫を超越した般若（智慧）の修行道。

威力を具える。非常に解脱した心。非常に解放された智慧。駿馬。大象。すべきことを為した。働きを為した。荷を下ろした。自利を会得した。輪廻への癒着を尽く滅した。清浄な智によって心が非常に解放された。一切の心力の聖なる波羅蜜の善修行』という。」

というまで、詳細に説かれた。その如く、

「食欲と瞋恚と驕りと愚痴の、本質は全くの分別（概念作用）によって生じさせられ、誤って入り込んだと知って、妄分別をせず、欲望を離れ、変化しないそれらの瞑想の居処は、一切事物である。」

と説かれた。

依拠するものである全くの煩悩が有ることを否定する > [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「食欲と欲す者を考察する」という第六章の解説である。

DECHEN 訳

5 善逝：^{ぜんぜい} 仏十号の一。チベット語では「楽へ赴いた」。

6 得無畏：^{とくむい} 「(輪廻に対する) 怖れが無いことを得た」
(mi 'jigs pa thob pa 『藏漢大辞典』参照)。

7 漏尽：^{ろうじん} 「(輪廻に落ちる) 漏れが尽きる」(zag pa zad pa 『藏漢大辞典』参照)。